

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第748号 平成26年6月6日

ウェアラブル

「ウェアラブル (Wearable)」というのは、直接身に着けられる程に小さなコンピュータの事をいいます。

「ウェアラブル」は、体に身に付ける事によって様々な情報が得られるようになり、生活のスタイルにまで大きな影響を与える事が予想されています。今はスマートフォン全盛の時代ですが、「ウェアラブル」はスマートフォンに続く次世代の端末として世界中から熱い視線を集めています。

この「ウェアラブル」の最先端の機器やサービスが一堂に会する国際見本市「ウェアラブル・テック・エキスポ」が、3月25日から26日にかけて東京ミッドタウンで開催されました。このエキスポは、日本では初めての開催という事ですが、最先端の技術である「ウェアラブル」の見本市が日本で開催されたという事は、モノづくり日本の再生という意味でも記念すべき事だと思います。

さて、一口に「身に付ける」といってもその形態は実に様々です。

「ウェアラブル」は、朝日新聞の記事（3月25日付）によると、6つの形態に分類出来るようです。

- かつら型：ソニーの「スマートウィッグ」
- メガネ型：NTTドコモの「インテリジェントグラス」
- 衣類型：東レの「ヒトエ」
- 腕時計型：ソニーの「スマートウォッチ」
- リストバンド型：ナイキの「フューエルバンド」
- 指輪型：ログバーの「リング」

こうしてみると、コンピュータの世界も、全く新しい領域に入ったという感がひしひしとします。私などは、完全にガラパゴス状態に置かれています。

昨年は「ウェアラブル元年」と呼ばれていたそうですが、その普及は加速度的です。

米調査会社ガ・トナーの試算によると、世界の「ウェアラブル」機器の出荷数は、2014年の4900万台から2020年には約4倍の2億300万台になる見込み（3月25日付朝日新聞から）だといえます。

2020年というと東京オリンピックが開催される年ですので、「ウェアラブル」によってオリンピックの見方や楽しみ方も大きく変わるのではないのでしょうか。

また近年は、「眼球に直接埋め込まれ、脳に直結したディスプレイ」の実用化も議論されているといいますが、もしも、そうした事が現実になれば、私達はターミネーターの世界に足を踏み入れるという事になるのではと、空恐ろしい気持ちになります。

いずれにせよ、「ウェアラブル」という機器の最大の特徴は情報アクセスの高度化、高機能化という事だと思えます。「ウェアラブル」によって人々の生活は劇的に変化するものと思われそうですが、同時に、情報へのアクセスが容易になればなる程プライバシーや著作権を如何に保護するかという問題もまた、大きくなります。

個人情報も含め、様々な情報が筒抜けになってしまう事態になったら、私達の平穏な暮らしは守れるでしょうか。

そうした不安を孕みながらも、既に、世界は新しい技術革新に向かって激しく競争しています。クラウドやスマホで後塵を拝した日本企業ですが、本格的な「ウェアラブル」時代の到来は、モノづくり日本が再生する大きなチャンスである事は間違いありません。（塾頭：吉田 洋一）